

〈小説〉佳作

返事

工学部 電気電子情報工学科 2年 山口 颯太

何気なく机の引き出しを引いてみると、色とりどりの小物の中に場違いな茶封筒が収められていた。

開封すらされていないその手紙は九月の中旬に届いたものだから、放置してから二ヶ月と半分が経とうとしていることになる。気持ちを言葉にするのも一苦勞な私に、わざわざ格式張った手紙という媒体は苦痛でしかなかった。誰も彼もが以心伝心で感情を伝えられたらどんなに楽なのだろうとたまに考えるが、それはそれで争いの火種になりそうだ。

そもそも返事をしようにも送り主の健一おじさんはすでにこの世を去っていて返す宛がなかった。おじさんとは小さい頃に手紙のやり取りをしてもらった事はあるが、ここ数年は手紙どころか顔を合わせたこともない。子供のお遊びに付き合ってくれていたのだから優しい人ではあると思う。おじちゃんと仲が悪かったという噂を聞いたことがあるが、今となつては誰に確認することもできない。

おじさんはこの手紙で何を伝えるつもりだった

のだろうと当然の疑問を今更ながら抱いたが、そんな過去のことは頭から振り払いベッドに近づく。私はベッドに倒れ込むと、口に入った髪を払った。今月の六日におじさんの訃報を受け、葬儀はその翌週に執り行われた。私は中学校の制服をクロージットから引っぱり出して、母に連れられるままに寒空の下を電車で揺られていった。

広々とした和室で長いこと開始時刻を待った記憶だけが強く残っていて、肝心の式の内容はよく覚えていない。どんな顔をしていればいいのかわからずに、下を向いたままお経を聞き流していたことだけが確かだった。

お母さんやおばあちゃんが涙を流していてもせいぜい困った顔で場をやり過ごすのが精一杯で、死という別れに今ひとつ実感が湧いていなかった。窓の外から聞こえる下校中の小学生たちの雄叫びではっと我に返る。もうそんな時間かと時計を見ると針は四時を指すところだった。

お昼ごはんの片付けがまだのことを思い出し、いそいそとベッドから離れる。相変わらず家の前を通る子どもたちの声が騒がしい。そんな環境音

を聞いているとまだ小学生だった半年前が恋しくなってきた。

洗い物を終えた私は水滴をズボンに吸い取らせながら部屋に戻って来た。再びベッドに飛び込むものの、秒針が何周かするだけの退屈すら我慢できずに私は体を起こす。寝るにしても雲ひとつない青空に対して、窓を揺らすほど強い風が存在を主張していて気が散って仕方がない。どうして良い天気と悪い天気が混ざるのだろう。もう少しわかりやすい単純な天気ならいいのにと不満が漏れた。

することを見失ってしまったと思うと、急にあの茶封筒が気になり始めてしまった。何をしようとするに手遅れではあるが、引き出しから茶封筒を取り出す。

両面を確認しても特段変わったことはなく、可愛げのない封筒にボールペンでそっけない封字が書かれていた。一度手にしてしまったのだから、ここで再び放置するのも気が引ける。遠慮なく乱雑に封を切ると、そのまま逆さにして振ってみた。すると二つ折りの便箋が床に落ちた。

現代っ子の私には少し硬すぎるような文面を想像しながら手紙を開くと、想像とは違い右下の隅っこに図が描かれているだけだった。

不規則に並べられた大小様々な大量の四角い図は二次元バーコードだろうか。枕元のスマートフォンから充電器を引っ抜きカメラアプリを起動する。バーコードに焦点を合わせて読み込むと知らないウェブサイトへのリンクが表示された。

なぜこんな物を送ってきたのかその意図はわからないが、おじさんのことだから怪しいサイトではないだろう。半ばそう確信していたのだが、いざ読み込んでみるとそんな考えとは裏腹に、怒涛の勢いで画面が切り替わっていった。

状況がわからないながらも私は慌てて取り消しの機能を持つボタンを連打したが、すでに処理は終了しているようだった。急に不安が襲ってきてしまい周囲を確認しながら、端末を一通り操作してどこにも異変がないことを確認する。

今はこれ以上操作をすべきではないかもしれない、とスマホを右手に握ったままベッドに体を投げ出した。

だが目を瞑れたのも束の間のこと、右手からメッセージの受信を知らせる効果音が繰り返し再生される。今度は何事だろうかスマホを顔の前まで持ってくる、謎の宛先からメッセージが十三件も届いていた。

架空請求というやつだろうか恐る恐る確認すると、視界に飛び込んできたのは画面いっぱい

の文字列だった。本来はメールのようにやりとりするコミュニケーションツールのはずだが、目を通してみると今回送られてきたのはどうやら小説らしいということがわかる。一昔前にケータイ小説というものが流行したと知識の上では知っていたがその類だろうか。

主人公の男子中学生が友達と喧嘩したり友達と様々なことを経験したりといった様子がコミカルに、それでいて優しい文体で紡がれている。もっとも文字が好きだったこともあり夢中になった私は、メッセージの怪しさなどすっかり忘れて夜ご飯の時間までその場に張り付いて読み進めてしまった。

手紙の開封から二週間経ったがメッセージは未だ届いており、私はそれらに一定の規則を見つけていた。メッセージは決まって水曜日と金曜日の午後五時に送られてきているのだ。内容は変わらず小説の連載だった。

今日はその金曜日で、受信の知らせを心待ちにしながら昼間はカウンセリングに出かけてきた。久しぶりの外出に気力を使い果たしてしまったため両足から力を抜いて何よりも信頼するベッドに倒れ込む。全身を任せる瞬間は包み込まれるような感覚がして安心した。

私は夏休みが明けてから一度も中学校に登校していない。最初の数日を行きたくないという気持

ちに負けて休んだところ、そのままズルズルと休み続けてしまった。もしかしたら時間を無駄にする才能にでも恵まれているのかもしれない。

そしてニュースで特集されるような悲劇的な理由も無いため、我が事ながら対処に困っている。せめて自分で決めたカウンセリングくらいは積極的に通いたいのだが、どうしても先生に心を開ききれていない自分がいた。

本当に秘密の相談なのかを気にして、勝手に言葉を選び、独りよがりのボードゲームをしているようだった。カウンセリングを受けるたび、どんな相談に乗ってもらっても最後の一步を踏み出さないといけないのは私でしかないことが証明されていくようで、より外に出るのが嫌になってくる。

そもそも私は嫌いな人にも笑顔を向けられるクラスメイトが単に怖くなってしまっただけなのだ。日常の中の単純なストレス発散が目的の愚痴の言い合いが、ここまで尾を引いてしまうととは思わなかった。例えば私を嫌いであつても優しく接してくれるだろうかと考えると、目の前の友達にすら疑いの芽が芽生えてしまいふとした時に不安に襲われる。

何を思われているのだろうと悪い方向に考えれば考えるほど教室から逃げ出したくなって、夏休み明けにそんな感情は爆発してしまった。もっと世界は単純で、みんな仲良くいられるものと思っていた頃の自分が懐かしい。

今回のカウンセリングを思い出すと自然とため

息が漏れてしまう。私はその場で寝返りをうつとしばらく天井を見つめスマホを手にとった。気を紛らわせるにはあの謎の小説の雰囲気がちょうどよかったのだ。

私が家に隠れている間に彼は女の子に二度振られ、体育祭で大活躍をし、気づけば大学生になっていた。受験では相当努力したようで有名大学の医学部に進学していた。

私のスマホ上だけで連載されているこの小説は、一話ごとに寓話的に教訓が描かれるコメディが大半である。だが今日の話は例に反して初めから陰鬱とした雰囲気をはじめ文章が詰め込まれていた。将来の進むべき道について主人公が頑固な父親と対立を始めたのだ。

主人公は小説家を目指したいと家族に打ち明け、父親は学費を出していることを武器に彼を説き伏せようとする。母親もどちらかというと父親の味方の方だった。長いこと言い争いが続けて日が落ちると、両者の間に母親が割り込み「ご飯にしましょう」と強引に言い争いを打ち切らせた。一時休戦の後、自分の部屋で悔しそうにしている彼の描写で今回の話は中断されてしまった。

いきなり作風が変わったため困惑したが、この展開も悪くないと思えた。どんな方法を使って父親を説得するのだろうと更新がいつにもまして待ち遠しくなった。

『続きが気になります』

心の中だけに留めていたはずの感想は、いつの

間にか指先を動かし謎の相手に催促をしてしまった。漏れ出してしまった言葉は取り消すには遅く、送信が完了してしまっていた。

『続きが気になりますよね』

すると間髪入れずに返事が来てしまいより焦ってしまふ。今更ではあるが相手が誰かすらわかっていないのにメッセージを送ってしまったのはいかなものだろう。

だが一度送ってしまったのだからと何度送っても変わらないのではないだろうか。そもそも相手は謎の小説家であつて先に送り付けてきたのはあちら側だ。好奇心に負けた私はそう自身を丸め込むと、謎の人物に質問を送ることにした。

『あなたは誰ですか？』

『私の名前はケンケンです』

ケンケン。やはりとも言うべきか、おじさんの名前の健一からもじつたであろうことはすぐに察しが付いた。だがおじさんはすでに亡くなっているはずだ。幽霊か代理人かは知らないが何が目的なのだろう。

『なぜ小説を送ってくるんですか？』

『何事も目的が大事ですよ』

どうにも話が噛み合っていない様に思える。その後も水をはさみで切っているような、手応えのない返事が延々と帰ってくるだけだった。そんな会話をしているだけなのに、一人でないのは久しぶりで楽しいと思えた。

更新を待つまでの間に自称ケンケンで暇つぶし

をしていると、あつという間に次の水曜日になった。時間通りに送られてきた小説では相変わらず父親との確執が続いており、互いに譲らない姿勢で睨みを効かせていた。

父親はというと医者道の道に進んでほしいらしく、苦い顔をして主人公の言葉を突っぱねる。だが主人公も成功経験を積んできたおかげか一歩も引くこと無く自らの夢を語り続けている。そんな彼に我慢の限界が来たのかついに父親が声を荒げた。

『いい加減にしる健一！』

健一という名前が確かに父親という登場人物から発せられたのだ。その言葉を皮切りに今までばかりに想像しやすかった自宅の間取りはお正月とお盆に毎年訪れているお母さんの実家で、対立していた父親は私の優しいおじいちゃんだった。

身も蓋もない言い方をしてしまえば、これは健一おじさんの日記だったのだ。おじさんはこの小説を通して一体何を伝えようとしているのだろう。

しかも次が最終話になる、と今回の話の最後に追記されていた。私の想像どおりであるなら次の更新は二日後の金曜日のはずだ。三ヶ月もの時間を湯水のように溶かしてきたにも関わらず、その空白の期間は随分と長いものに感じられた。

だが記念すべき最終話の更新日、その日はいくら待ってもスマホがメッセージの受信を知らせる

ことはなかった。やがてくたびれたお母さんが仕事から帰ってきて、私も居間に向かうことになる。

「今日ちよつと遅かったけど何かあったの？」

「健一おじさんの支払停止とか掃除とかやって来たからね。それからお買い物してたら遅くなっちゃった」

「あーおつかれ様ー」

慌ただしく周囲を行き来するお母さんを見つめることしかできず、小さくなって椅子に座っているテーブルの上に料理が並べられると、テレビの電源をつけて二人で食べ始める。テレビのバラエティはどこも似たりよったりだったため適当に選んだクイズ番組を見ることになった。

しばらくすると難読漢字のコーナーが終わり、ベストセラー小説のランキングクイズが始まった。その画面を見るやいなや何かを思い出したように、なぜか台本を読むようなぎこちない声で会話を振ってきた。今日はみんながどこかおかしいように感じる。

「そういえば小説好きだったよね？」

「うん。部屋にたくさんある通り」

小さな頃からたくさん読まされたから部屋の本棚には小説が詰まっている。

「最近はどうな本読んだの？」

「あーほら、この人の」とクイズとして使われた作家の顔を指差す。あの秘密の小説についてはまだ秘密にしておく。代わりに当たり障りのないタイトルを挙げていく。

わかってないだろうにお母さんは大げさに頷くと、最後に一言問いかけてきた。

「もし新しい小説があったら読みたい？」

学校も行っていないのに気を使わせて本まで買わせるのは避けたかった。その優しい申し出をやるわりと断るとテレビに視線を移す。クイズコーナーはすでに終わり、人と会話できる最新技術のロボット特集をしていた。

食後に部屋に戻ってみてもやはり小説の続きは届いていなかった。

『遅いぞー』

メッセージを送ってみたが少々馴れ馴れしかったかもしれない。しかしそれ以前にいつもであればすぐに返信が来るのに今日は何も反応がない。おかしい日というのはあながち間違いではないのかもしれない。

その後も何度午後五時を過ぎても送られてくることはなく、ついに次の水曜日が数時間に迫ってきていた。

その日は都心の十二月にしては珍しく雪の降る一日だった。お母さんも凍えながら帰って来て、コンロの前に立ったときは火の熱で生き返ったような顔をしていた。テレビでは今日の天気と日付を関連付けてホワイトクリスマス特集と銘打った映像が流れている。

もう中学生になったわけだけどサンタクロース

は来ることになるのだろうか、なんて考えながらひたすらにご飯を口に運ぶ。食べ終わると私はお母さんにお風呂を先に譲り、自分の部屋に戻り寝転がることにした。

クリスマスプレゼントに最終話が届かないものとスマホを見ているがまだ届いていない。いつそ諦めてしまおうかと天井を見上げていると、ふと今後の展開を知る方法を思いついた。あれはおじさんの家の出来事なのだから当然お母さんの家の話でもあるわけで、お母さんはすべてを知っているに違いないはずだ。

だがお風呂を譲ってしまったせいでお母さんの部屋には誰もいない。ここで待ち続けるのも寒いな、と窓の外でちらつく雪を眺めながら何気なく部屋を見回す。するとこの部屋に似つかわしくない原稿用紙の束が目についた。

手にとってみると一枚目の一行目には三マス開けてから私の名前が書かれていた。次の行にはおじさんの名前が書かれていて読書感想文が思いついて起こされる。

これは遺品なのだろうか。さっきのお母さんはこれを隠していたんだと妙な態度の理由に合点がいく。私がこんな小説を見つけても対応に困ってしまうだろう。

肝心の内容はどういうと私が読み込んだ例の小説と同じで、作者とおじさんが同一人物であることを裏付けてくれた。ただ一つ違うのは途中で届かなくなってしまうたあちらの小説と違って、こち

らは最後まできちんと完結していた。

私は未読の部分を咀嚼するようにしっかりと読み込んでいく。

オチから言ってしまうと、彼は小説家の道を断念した。結果を残せば考え直しても良いという父親との約束は守れず、そのまま医者を目指したと書いてある。

ただおじさんが書いた物語を面白いと言ってくれた子供がいたらしい。そのお陰で別の形で夢を追い続けようと決めた自分の気持ちを綴っていた。そんな彼が小児科用に子供向けの絵本を自作している姿で物語は締められている。

自分を信じずに諦めていたらこんないいとこ取りはできなかったと、他人を信じて自分らしくあり続けたら案外道は開けると熱く語られていた。思い返してみると愛を告白したり将来を言い争ったりと、この小説は自分を信じた結果を一貫して主張していたように思う。

つまりこれは小説ではなく手紙だったのだ。どこから聞きつけたのか、私の境遇を案じたおじさんの壮大で回りくどい私好みの手紙。

読み終わって全体に散りばめられてきた立派な教訓が得られた。私くらしいの子供が読むのに最適な小説だったのではないだろうか。さすが小説家を志していただけあって会えることならば感想を伝えたい。

だが小説として面白いというただそれだけであり、私の心には何も響かなかった。

トライアングルを握って叩いた時のような、無味乾燥な感情が心のなかに広がっていく。あれだけ待ちわびた最終話が突きつけてきたのは私にとって何の手助けにもならない正論で、私が避けてきた真実だった。

こんな筋の通った理屈で納得できているのなら、私はとうに教室で陰口に興じているはずだ。自分が傷つかない世界を求めている私はこんな妥協案を受け入れたくなかった

だけど、自己満足ともとれるものの、おじさんがあつたけの優しさを私に向けてようとしてくれたのは違いなかった。私のためにしてくれた大掛かりな仕掛けは原稿用紙の束という形になってここに残っている。世の中にはこんなにも優しさを向けてくれる人がいると再確認できた今なら、私も少しは怖がらずに一步を踏み出せるのかもしれない。

目の前の笑顔が本物でも偽物でも、笑顔に向けてくれた共通の事実を目に向けていこうと思えた。何よりも、いざ会いたくなった人が会えないことのないように、今のうちに行動しておきたいというのが一番だった。

『元気でね』
と感謝と別れの混じった挨拶を画面の向こうに向けてほしい誰かに向けて送る。前まではすぐに返ってきたメッセージが返ってくることはなかった。

原稿用紙を元通りにして部屋を出ようとすると右足の中の水音が弾けた。何事かと上を見るが特に

雨漏りの様子もなく、ゆっくりと頬に触れてみると雫の伝った跡が指で擦れた。

今年最後の登校日は、昨日までの降雪を忘れさせるほどの快晴だった。だが顔を出した太陽も季節の流れには勝てないのか、家の中は引き締まった冬の冷気で満ちている。

ベッドから抜け出すと足に触れるフローリングの冷たさに身を縮こませながら洗濯物を漁り始める。洗面台などを行ったり来たりして、身支度を終えてから居間に向かった。

テレビが垂れ流されている居間ではお母さんが朝ごはんの支度をしている最中だった。床の軋む音に気づいたのか驚いた顔でこちらを振り返るとおはようと言ってきた。昨夜は突然登校すると言出した娘に対して驚きを隠せないでいたようだったが、特に理由を追求することもなくわかったとだけ言ってくれた。淡白なその態度が今の私には逆にありがたかった。

テレビでは昨夜から降り続いた雪について人通りの多い交差点を例に取り語り続けている。別のことに気を取られていると、ぬかるんだ地面に簡単に足を取られてしまうらしい。現在お母さんが横目で私をチラチラ見ているが出勤中に滑ったりしないか心配だ。

ごちそうさまと言い残し自分の部屋からリュックを持ち出す。玄関が近づくのとたんにお腹が痛

くなってきた気がした。

構わずドアノブに手をかけると扉を開く。一層冷えた空気が家の中にゆつくりと染み込んできた。寒さから小さく震える体を抑え込み、勢いに任せて玄関を駆け出した。

学校に近づいてくると今すぐにでも逃げ出したくなってくる。だが卑怯な私は時間割が終業式しかないこの日を久しぶりの挑戦に選んだのだ。少しおじさんの勢いに乗せられすぎたかも、なんて後悔しつつ今更後ろを向けない足を無心で前に進めていった。

始業のチャイムが鳴るギリギリに到着すると、すでに体育館に移動したのか教室には誰もいなかった。テキパキと荷物をロッカーに詰めていると、案外体は覚えているものだなあと習慣というものの強度を実感する。

体育館まで駆けていくと無人の教室からは考えられないような喧騒が私を迎えた。クラスごとに一列に並んでいるが、遅刻者は最後尾に並ぶというルールに助けられて誰にも気付かれないように位置に付く。

やがて式が始まると校長先生の長い話を筆頭に、ここで行う必要があるかと問いかけてみたくなるお知らせが順々にされていった。手足の末端が寒さで痛み始めるのをこらえつつ、時計の針が進むのをまだかと待ち続ける。

関係のない部活動の、価値を知らない入賞を形だけの拍手で祝うことも繰り返した。それを二十

回ほど繰り返したところになると、ようやく受賞者の列は無くなり校歌が流れ始める。思った以上にハードな学生生活を送っていたことを思い出しながら、式の終わりと解散の指示に安堵した。

あとは教室の隅で帰りの時間を待ち、初めからいなかったようにその場を去ってしまえばいい。ひとまず今日はそれだけでいいのだから。

帰りの時間まではなるべく人混みに紛れて隠れながら過ごそうと校舎を回り道していると、曲がり角で誰かとぶつかりそうになってしまう。慌てて前を向いて謝ると、あろうことか目の前の相手は入学以来共に行動していた同じグループの友達だった。

気づかなかったことにするには難しすぎる距離と時間の経過をごまかしきれずに私達は見つめ合う。

気まずさをかなぐり捨てて挨拶をしようとすると声がかすれた。昨夜の空気が乾いていたこともあり、久しぶりに使われる声帯から出た音はおおよそ人に伝えるための声ではなかった。

慌てて咳払いをするとポケットのスマホをスカートごと握りしめて再び久しぶり、と声を絞り出した。軽く俯いたままだったため、顔を上げたときに誰もいなくなっていることも覚悟していた。

そんな不安を胸にゆつくりと前を見ると、彼女は「元氣だった!？」と私に飛びかかってくる寸前だった。当然避けることもできずにそのまま彼女の体を受け止める。

凍えるような温度に対して人の温もりが確かに感じられた。

「元氣だよ」

上擦った声を漏らした喉は少し震える。思わず頬が緩み、彼女を抱きしめる力が一層強くなった。案外この世の物事は私に都合よく運んでくれるものなのかもしれない、なんて妄想が頭に浮かぶ。冬独特の乾いた風が、汗のにじむ手の甲を優しく撫でていった。

●制作者より

インターネットやハードウェアの発達で世界中の人々と喜びを共有できる時代になりました。ですが他人の敵意や怒り、妬みなどを押し付けられることも増え、利便性に比例するように息苦しさも増したように思います。

人生の初めから終わりまで一人でいれば、どんな感情のトラブルに巻き込まれることはないのですがそうは問屋が卸しません。困ったことに私達は他者と関わらないと生きていくことができないのです。

たった一人では可能だとしてもただ生き延びることが精一杯で、だからといって他者と関われば多かれ少なかれ傷ついてしまいます。

こればかりは私達が抱え続けるしか無い問題だと思うのですが、ふとそんなジレンマを己の常識が揺らぎやすい思春期の中学生にも経験させてみたくなりました。

この物語を通してほんの少しでも心に届くものがあれば幸いです。